Osaka Shoin Women's University Repository

源氏物語に見る待遇法の一用法について

久保　重

周知の通り、源氏物語の地の文では、親王以上の皇族とその家族、上達部以上の貴族とその家族とは、敬語を伴った云い方で叙述され、特に天皇・皇后・上皇・皇太后・皇太子には最高敬語が用いられる。ところが、この物語を読んで行くうちに、右の法則では説明のつかない待遇法に出会うことがしばしばある。その様ないわゆる破格の待遇法のうち、作中人物や場面のイメージの表現にかかわっているものだけを取り上げて考察しようと思う。

A　敬語段階を下降させる表現

(1)次の文は、尚侍に任ぜられて初参内した玉鬘の局に、冷泉帝が不意に訪れる場面である。

（帝は）聞し召しにもこよなき（玉鬘の）近かまさりを、初めよりさる御心なからむにてだにも、御覧じ過すまじきを、まいていと妬う飽かず思さるれど、ひたぶるに浅き方に思ひ疎まれじとて、いみじう心深き様に宣ひ契りてなつけ給ふもかたじけなう、（玉鬘は）我は我かはと思ふものをと思す（真木柱）

帝には最高敬語がつくのだが、最初の「聞し召し」以外は、～～線で示した通り、最高敬語を用いていない。同じ巻のこの段の前は

上（冷泉帝）渡らせ給ふ

ただかの大臣（源氏）の御けはひにたがふ所なくおはします

（玉鬘の髭黒との結婚を帝は）いたう恨ませ給ふ

（玉鬘の既婚を帝は）まことにいと口惜しと思し召したり

またこの段の後も

（帝は玉鬘の傍らを）おはしまし離れず

（髭黒が玉鬘の退出を急ぐのを）憎ませ給ふ

（帝は）かへりみがちにて渡らせ給ひぬ

と、前後とも一句も落さず最高敬語がついているので、この一段だけ意識的に敬語段階を一段階ひき下げたものと見てよい。

玉鬘は、帝の言葉と態度とを「かたじけなう」思う。美貌の若き帝が特に気を遣って彼女にやさしくして下さるからである。その物柔らかな私人的なイメージを描くために、作者は公的な格式張っ

Osaka Shoin Women's University Repository

た最高敬語をわざと避けたのだと私には思われる。この様な生れのよい人だけの持つ優しさと気品のない交った、独得の艶冶なイメージを毀さないでそっと表現する方法として、天皇の敬語段階を下降させると云う大胆な手段が考え付かれたのだと私は推測する。

(2)中宮には最高敬語が用いられるのであるが、御法の巻における明石中宮が二条院に紫上を危篤の病床に見舞う場面の、一連の叙述には最高敬語が見えない。すなわち

(イ)（明石中宮は）しばらくはこなた（紫上の病室）におはすれば

(ロ)（紫上は）などかうのみ思したらむと（中宮が）思すに、中宮うち泣き給ひぬ

(ハ)御読経などによりてぞ（中宮は）わが御方に渡り給ふ

(ニ)中宮は（内裏に）参り給ひなむとするを、（紫上は）今しばしは御覧ぜよとも、聞えまほしうおぼせども……宮（中宮）ぞ渡り給ひける

(ホ)宮、秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見むと聞えかはし給ふ

(ヘ)宮は（紫上の）御手をとらへ奉りて、泣く泣く見奉り給ふに

などである。明石中宮には、当然のこととして、これまで常に最高敬語が用いられていた。この度、紫上の私邸二条院へ宮中から退出した際も、次に見る通り最高敬語が用いられていた。

（紫上が）かくのみおはすれば、中宮この院（二条院）にまかんでさせ給ふ。（中宮は二条院の）東の対におはしますべければ、こなたに（寝殿で紫上は）はた待ちきこえ給ふ……上達部など、いと多く仕うまつり給へり、（御法）

中宮の公式の外出の行列を整えての退出であったのだが、最高敬語はこの部分だけで、あとは巻末まで中宮には一度も最高敬語は付かない。上記の通りである。これは、二条院滞在中の中宮が全く一私人として、子として、育ての母紫上の病を真心を尽して悲しみ案じるイメージを表現したものだと解したい。中宮の心情は勿論、詞・顔色・物腰に漂う。その愁いの色は、やさしい女らしい人の子のそれである。公的な、秩序の世界のいかめしい地位身分を、二条院内では、特に紫上の傍では中宮は脱ぎ捨てているのである。その素直な真心は紫上にも源氏にも通じている。控え目な紫上が、中宮に日常的家族的言語待遇を以って「今暫し御覧ぜよ」と思う(例(ニ))。紫上、源氏、中宮の三人の和哥唱和の場面でも、中宮は特別扱いをされない(例(ホ))。そして紫上の死後も、中宮はいつまでも同じ心持で、紫上を慕うのである。

(ト)中宮なども、おぼし忘るる間なく、恋ひ聞え給ふ（御法）

御法の巻の主題の側からすれば、慕われる紫上が賞讃されているのだし、敬語下降には、時代背景としての、摂関政治最盛期における後宮と摂関の家庭との深いつながり方の反映をも見逃すことができないのであるが、以上は、この稿の目的とする待遇法の変化によって表現されている明石中宮のこの場のやさしいイメージについてのみ考えてみた。

(3)次は、宮中の桜花の宴の夜、弘徽殿の細殿で、光る源氏と朧月夜が初めて出会う場面である。

Osaka Shoin Women's University Repository

（源氏は）酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむことは口惜しきに、女（朧月夜）も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし

（花宴）

源氏は物語に登場して以来敬語で叙述されているが、この場面では宰相中将、上達部である。女は誰ともわからないが、実は右大臣の六の君。敬語を除いたために、恋の場面の若い二人のイメージが活き活きと美しく描き出されている。敬語を除くことによって、作者は、本質的なものと、然らざるものを峻別し、この場面の表現に必要なものだけを採ったと云えよう。

(4)源氏は明石の姫を紫上の養女として養育するために、大堰の里に棲む明石の方の手許から二条院に移そうとする。左は薄雲の巻のその条であるが、文中の無敬語の部分について考えたい。

姫君はなに心なく、御車に乗らむことをいそぎ給ふ、寄せたるところに、母君みづから抱きて出で給へり、片言の声はいとうつくしうて、（母の）袖をとらへて「乗り給へ」とひぐも、（明石は）いみじう覚えて

末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき

えもいひやらずいみじう泣けば……

今まで敬語で語られて来た明石の姫に、〜線個所で突如敬語が欠落する。母、明石の御方は播磨前司の女、源氏と同席する時には無敬語になるが、幼い姫には源氏と同席の場合も敬語がつく。数え年三才のこの姫は、父源氏の心算では将来皇后の地位が予定されているのだ。この場面より前には、

（姫は）物いひ笑ひなどして、（源氏に）睦れ給ふを見るままに、にほひまさりてうつくし（松風）

若君手をさし出でて、（源氏の）立ち給へるを慕ひ給へば（同）

（姫の）いとうつくしげにて、（母君の）前に居給へるを（源氏の）見給ふに（薄雲）

と、いつも敬語がついているので、ここで突然敬語が除かれたのは、本来の、尊敬したり卑しめたりする敬語段階の下降でないことは明かである。そこに表現上の一技法としての敬語除去を考え得ると思う。その一時点の姫の声と袖をとらえる仕草とを強調して表現してあるのである。声の可愛らしさ、幼い振舞のいじらしさを、この方法によって描き出したのだ。一方、明石は、迎えの車に母の同乗を求める姫の願いに一瞬身をひき裂かれる様な心の痛みを感じる。源氏との愛に彼女の払った犠牲の量は測り知れない。身分差と多妻制に苦み抜き、今またそのためにこのいたいけなわが子とも別れねばならない。その緊迫した感情は無敬語だけが表現し得るであろう。姫の声、姫の姿、それは同時に、明石の目と心に焦げついた心象としても表現されているのである。そして次の明石の和哥に結び付く。

（なお、上掲例文中の

母君みづから抱きて出で給へり

は、明石に相当する待遇法の枠からは破格である。源氏と同席している場合だから敬語が付かないところであるが、敬語を付けることによって、迎えの車の寄せられている場所に母子の現れる場面の

Osaka Shoin Women's University Repository

光景が描き出されている。）

(5)当の人物の敬語を除くことによって、滑稽感・嫌悪感・軽侮感などをイメージづける場合が見られる。左は真木柱の巻の一節である。髭黒の大将についての記述をながめて見よう。

1「思はずに憂き宿世なりけり」と、（玉鬘）の思ひ入り給へる様のたゆみなきを、（右大将は）いみじう辛しと思へど、おぼろけならぬ契りの程、あはれに嬉しく思ひ、見るままにめでたく、思ふさまなる御かたち有様を、よその物に見果てて止みなましよと、思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁のお許をも並べて頂かまほしう思へど

髭黒の右大将は、右大臣の子、朱雀院の女御の兄弟、東宮の伯父に当たり、次代を背負う地位にある上達部であるから、勿論敬語がつくのが当然であるのに、〰〰線で示した通り、この比較的長文の間に一箇所も敬語が見当らない。一方その新婚の相手の玉鬘には、一句も落さず敬語（—線）がついている。玉鬘は内大臣の女、太政大臣（源氏）の養女であるから、これで正当な待遇法がつかわれている訳であるが、一方、髭黒の無敬語段階墜落を際立させる効果をも担っている。

髭黒も平素は敬語を伴って語られるのが、常であった。

右大将の、さばかり重りかに由めくも、今日の装いとなまめきて、やなぐひなど負ひて、仕うまつり給へり（行幸）

と、行幸の供奉の場面であるから敬語は最低段階であるが、それでも付いている。

大将は、この中将（柏木）は同じ（右近衛の）すけなれば、常に呼びとりつつ、ねんごろに語らひ、大臣（柏木の父内大臣）にも（玉鬘懇望を）申させ給ひけり（藤袴）

この大将は、東宮の女御の御はらからにぞおはしける。（同）

年三十二、三の程にものし給ふ（同）

色めかしくうち乱れたる所なき様ながら、（玉鬘に）いみじくぞ心を尽しありき給ひける（同）

強引な手段で玉鬘を妻にした後も

「内に聞し召さむ事もかしこし、しばし人にあまねく漏らさじ」と（源氏が髭黒を）諫め聞え給へど、さしもえ包みあへ給はず（真木柱）

と敬語がついている。

上掲例文(1)に髭黒に敬語が見当らないのは、語り手の彼に対する憎みもあるが、玉鬘に用いられている待遇法と対照的にしてある点を見逃してはなるまい。玉鬘の冷淡な取り澄まし方と、おずおず、ほくほく、喜びのつつみかくせない髭黒を対比して、髭黒の武骨実直な挙措・心情を際立たせて表現してある。それはみやびとはおよそかけ離れた「をこ」のわざである。敬語を剝奪したのでよくその感じが表われている。

これまでにも髭黒が無敬語で語られている場面があった。一つは

色黒く髭がちに見えていと心づきなし（行幸）

もう一つは

（北の方の髭黒より）年の程三つ四つがこのかみは、殊なるか

Osaka Shoin Women's University Repository

たはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、おうなとつけて心にも入れず、いかでそむきなむ、と思へり（藤袴）

である。前者は、大原野行幸の供奉の際、玉鬘の眼に映った彼の武骨な容貌に対する嫌悪感を、無敬語で表現したものと思われる。後者は、年長の北の方に対する彼の態度や心情を暴露する語り手の批判的心理が、無敬語を以って表わされているのだろう。女君の嫌悪感と語り手の批判的心理状態とは、ここで問題として取り上げている、例文(1)でも明らかに読み取ることができるが、(1)には、髭黒のをこな姿のイメージが主として描かれている点に注目したい。無敬語表現をいくつか畳み重ねる方法で、表現手法として一段飛躍した、人物造型という効果を収めているのである。

(6)下降待遇法を対照的に使う手法によって、可視的な具象世界と不可視的な諦観の心境とを描き分けた例として、次の、紫の上主催の千部経供養の法会の後宴の翌暁の光景を描いた段を挙げたい。

ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色色、なほ春に心とまりぬべくにほひ渡りて、百千鳥のさへづるも笛の音におとらぬ心地して、物のあはれも面白さも残らぬ程に、陵王の、舞ひて、急になる程の末つ方の楽、花やかに賑はしく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる物の色色なども、物の折からにをかしうのみ見ゆ（御法）

この長文の間に一つの敬語をも見ない。〰〰線を付した所などは、「御心とまりぬべく」、「ぬぎかけ給ひたる」と、当然敬語で語られてもよいところである。前者は、春を愛した紫の上を連想させる。場所は二条院（紫上の私邸）だし、特に、上の「なほ」という語は、「出離の願が聴かれないなら、今はせめて現世に一切の執着を絶って静かに死を迎えよう」と志している紫上の心境を抜きにしては解し難いところである。後者は、主語「皆人」が、「親王達上達部」の加っている参列者を意味しているので、二者共敬語が必要である。とすれば、作者は意識的に敬語を排除して、新しい意味を替りに付与しているのである。この問題は、この文の続きと対比して読むと更に明らかになって来る。

上下心地よげに、興あるけしきどもなるを見給ふにも、残少しと身を思したる御心の中には、よろづのことあはれに覚え給ふ

（同）

紫の上にだけ一句一句丁寧に敬語がつく、試みに敬語を去って音便してみるとよくわかるが、敬語が加ったために、言葉にしみじみとしたひびきをかもし出すので、そのために、紫の上の孤独なひっそりと哀しい心情が浮び上ってくる。細く脆くなった病身のこの君の感性が、周囲と隔絶した小宇宙を構成している。主催者でありながら、紫の上は、華やいだ壮麗な眼前の世界とは別の領域で、残り少ない生をしみじみと感じているのである。

（「上下」は、大成の索引によると17例。いずれも敬語を伴わない。この御法の巻を一先ずおくと16例、その内、消息文の書様の体裁（末摘花）と、僧の上臈下臈（賢木）との二例以外は、すべて側近の男女の召使について云ったもので、左の通りである。

（源氏は）かの翁のためまで上下おぼしやりて（末摘花）——末

Osaka Shoin Women's University Repository

摘花の召使達
殿の事取り行うべき上下定め仰せ給ふ(須磨)――二条院の家臣達
上下みな(紫の上の方に)まう上らせ給ひて(同)――源氏方の女房達
上下となく(大炊殿に)立ちこみて、いとらうがはしく泣きとよむ(明石)――源氏の侍臣達
月日にしたがひて上下の人数少くなりゆく(蓬生)――末摘花の女房達
宮人も上下みな(源氏に)心かけ聞えたれば(乙女)――朝顔斎院の女房達
上下泣きさわぎたるはいとゆゆしく見ゆ(真木柱)――髭黒の北の方の女房達
ここらの男女上下ゆすりみちて泣きとよむに(若菜上)――朱雀院の侍臣女房達
そこらの女房の事ども、上下のはぐくみは、おしなべてわ(源氏)が御扱ひにてなむ(鈴虫)――女三宮の侍女達
(紫上の)御正日には(六条院の)上下の人人みないもひて(幻)
院のうちの上下の人人(竹河)――冷泉院の侍臣女房達
殿人あまたつどひ上下の人立ち騒ぎたれば(姫宮達は)心細さの名残なく(総角)――薫の家来達
かの御あたりの人は上下心浅き人なくなむ惑ひ侍りけるままに(宿木)――亡き源氏の侍臣女房達
悲しくいみじきことを上下の人つどひて泣き騒ぐを(蜻蛉)――浮舟の女房達

それで、「上下」を紫の上の女房達・召使達と解する。)

日頃心を許して召し使う大勢の側近の女達がみな、楽しげに目前の感興に心を奪われているのを見て、神経が過敏になっている紫上は孤独感が身に沁みる。ひっそりと醒めた心に、「ひとりまず去り行く残り少き身」の感慨に浸る。

これと対蹠的なのが、上掲の無敬語で描かれた世界である。この無敬語の文体は、集団のかもし出す豪奢で陶酔的な雰囲気を強調して伝えている。荘厳・華麗・優雅――善美をつくした八講も後宴も二条院の春の曙の園池の光景も、しかしながらみな此岸の世界に属する事象である。それは、永遠世界に帰属しかけている人の側から眺めると、対象が美的であればあるだけそれだけ地上的に感じられて、別世界の感がそそられることになるのである。無敬語で描いた世界と、敬語をつけて語られる世界とを、私はこの様に読み分けたが、間違っているだろうか。

B　敬語段階を上昇させる表現

1　殿(源氏)はあいなくおのれ心懸想して、宮(兵部卿の宮)を待ち聞え給ふも(宮は)知り給はで、(玉鬘より)よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いとしのびやかにおはしましたり(螢)

兵部卿の宮に最高敬語がつかわれているのは、破格である。作者は「おはしたり」といわずに「おはしましたり」という方が、この

Osaka Shoin Women's University Repository

場の宮の登場し方を表現するのに適していると考えたのであろう。この文の少し先に、

夕やみ過ぎておぼつかなき気色に、うちしめりたる宮の御けはひもいとえんなり。(中略)うち出でて思ふ心の程を宣ひ続けたる言の葉おとなおとなしくひたぶるにすきずきしくはあらでいとけはひことなり。大臣(源氏)、いとをかしとほの聞きおはす

(同)

とある。光る源氏は「おはす」である。勿論、兵部卿の宮にもそれを用いるのが正当なのであるが、作者は「おはします」を採る。この場合、最高の敬意は、地位に関係なく、宮の訪れ方の優雅さを表現するのに、ふさわしいとされたのであろう。同じ螢の巻で、源氏は、弟兵部卿宮を評して、花散里にこう語っている。

用意気色など由あり愛敬づきたる君なり

人人の敬愛を受けるにふさわしい優雅な人品、衣服と着こなしの趣味のよさ。その親王が供人にまで気配りの行き届いた静かな訪ない方で現われた、背景には折から曇り空に夕月がほのかに出ている——みやびやかな懸想人の登場の光景を、作者は、先ず、一語を以って強く提示したい、その目的に「おはしましたり」が選ばれたのだと私は考える。最高に素晴らしい来訪者の出現を意味するのに、敢えて破格の敬語を適用し、しっとりとした美を象徴的にしかも強調して表現したのだと考える。(河内本と別本中の一本は、「おはしたり」となっている。敬語の法則上それが合理的ではあるが、その場合、ストーリー本位になって、イメージ表現の力は持たない。上掲青表紙本の本文とは性格を異にするものと云えよう。)

人物のみやびやかな美しさを強調して表現する手段として最高敬語を用いている例を続いて挙げると

2 けぶりのいと近く時時立ち来るを、これや海士の塩焼くならむと思しわたるは、おはします後の山に柴といふものふすぶるなりけり(須磨)

3 名残なほよせ帰る浪荒きを柴の戸おしあけて眺めおはします

(明石)

僻遠の地に流離する光る源氏が、あるいは鄙賤な(2)、あるいは荒廃した(3)環境との対照で更に気高く優美に見えるさまを、敬語段階を上昇させて、強調表現したものであろう。「おはす」でなく、最高敬語の「おはします」であるからこそ、絵巻物の一場面に、物語の主人公を描き据えた様な、みやびやかな情調を醸し出すことができたのである。

次の例も、主人公のみやびやかなイメージを強調表現したものと考えることができよう。

4 その夜、おとど(左大臣)の御さとに、源氏の君まかでさせ給ふ、作法(姫君との婚儀)よにめづらしきまで、もてかしづき聞え給へり、いときびはにておはしたるを、ゆゆしう、うつくし、と、思ひ聞え給へり(桐壺)

この日加冠したばかりの十二才の智君「源氏の君」を、左大臣は鄭重にお迎えする。神が魅入れそうで怖しいほど可憐で美しい、そのみやびやかさを最高敬語を用いることで表現したのが、傍点部

Osaka Shoin Women's University Repository

分ではなかろうか。「源氏の君」といい、左大臣家を「おとどの御さと」という云い方にはまだ先刻まで童姿であった皇子のやわらかい感触がある。この君の入来を、九重の宮廷から今し天降った、絵にもかけない様な花聟君という印象で左大臣家の人々は受け入れたであろう。その感動的光景の想像から「まかでさせ給ふ」という最高敬語が自然に生み出されたのだろう。河内本の多くは、ここが、「まかでさせたてまつり給ふ」となっている。この場合は、桐壺帝が主語で、「させ」は使役、父帝が源氏を左大臣家に退出させたという意味になる。上掲青表紙本の本文の場合でも、「させ」を使役と解することは文法的には可能である。しかし私は上述のごとく、主人公の「ゆゆしううつくしき」少年美を象徴的に表現するために最高敬語を特に用いたものと理解したい。

源氏物語は美的イメージを描くことに力を入れている作品である。また、イメージを積み重ねて筋を展開して行く方法を採っている。その間に独得の抒情的な優美な情調を生じるのであるが、ここに見る如き待遇法を利用して登場人物のイメージを造型する表現技法は軽視できない効果を加えていると云えるだろう。

(注)1、敬語段階の各部名称は玉上琢弥博士の分類を拝借した。

2、引用本文は角川文庫「源氏物語」に、校異と索引は源氏物語大成に拠った。

3、校異は本稿の問題とする個所のみに限った。

4、後撰集恋三「大納言国経朝臣の家に侍りける女に平定文いとしのびて語らひ侍りて、ゆくすゑまで契り侍りける頃、この女にはかに贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにければ、文だにも通はす方なくなりにければ、かの女の子の、五つばかりなるが、本院の西の対に遊びありきけるを呼び寄せて、母に見せ奉れとて、かひなに書きつけ侍りける、平定文、昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りしなごりなるらむ、返し、よみ人しらず、うつつにて誰ちぎりけむさだめなき夢路に迷ふわれはわれかは」